

アンダマン島における

戦犯問題について (92・5・14)

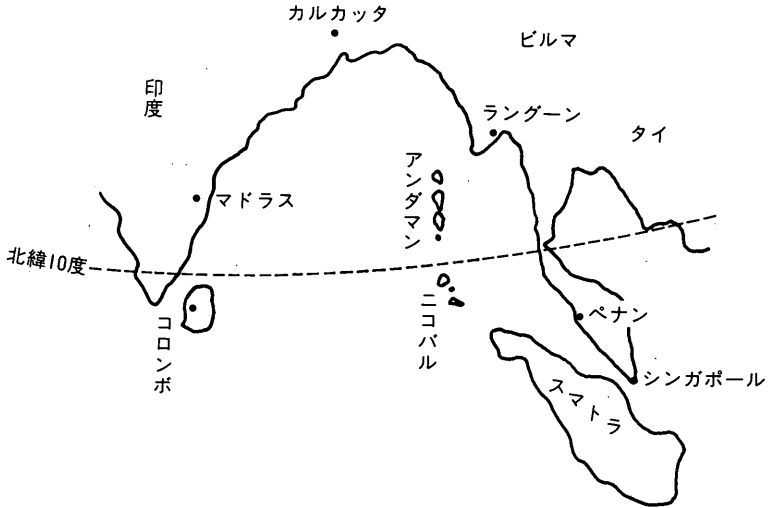
寺前 章 (昭16・理甲)

アンダマン島というのはあまり聞きなれない島で、ご存じのない方もおられると思います。付図がございますが、丁度マレー半島の西、また南のスマトラから上りますとニコバル、その北にアンダマンそれからビルマという風になっております。私は戦争中、海軍のレーダーサイトの指揮官としてアンダマン島の海軍部隊に約一ヶ年赴任いたしておりましたので、非常に懐かしいところですが、この島で起きました、ちょっと変わった戦犯問題についてお話ししたいと思います。

本論に入る前にアンダマン島について若干述べてみたいと思います。この席に川喜田さんがおられますので、後から民族学の専門的立場からのご意見をお伺いしたいと思いますし、また戦争裁判については環さんもおられますので専門的なご意見をお伺いしたいと思います。

アンダマン島についての報道記事を拾ってみますと、随分古い話ではマルコポーロの「東方見

付図



聞録」に出しております。マルコポーロは最初陸路中国に往き、帰る時は海路シンガポール、マレー、スマトラを通過してインドに立寄ったのですが、スマトラで伝聞として聞いたことを「東方見聞録」に載せております。それによりますと

「アンダマン島の住民は動物さながらの生活をなし、頭部は嘘いつわりではなくほんとうに猛犬そっくりの肉食種族であり、云々」と。そういうような記事があります。あれは確か、何世紀頃ですか、十二世紀位でしょうか。

それからずっと後に、例のシャロック・ホームズの小説の中に「四つの署名」とか、「四人の署名」とか「四

人のサイン」とか名前はいろいろありますが、その小説の中に一つの舞台としてアンダマン島が出て参ります。お読みの方も多いと思いますが、どういう小説かと申しますと、この島の原住民であるネグリート族の一人と、この島は英国統治時代はインド、ビルマ人の流刑の地ですので、流刑のインド人一人とが共謀して、ロンドンで吹き矢を用いて殺人事件をおこしたということを主体にした小説であります。

それからずっとさがりまして、昭和十七年二月に日本軍がこの島を占領したことを報道されております。これはビルマ占領の日本軍への海上よりの補給路の安全を確保するためスマトラ、ニコバル、アンダマンを占領し、そこに航空基地、艦船の基地を設けたのであります。

さらに数年前に、大韓航空機がインドからラングーンに往く途中アンダマン海の上空で爆破された事件があり、その後の調査で日本人になりました北鮮の作業員の仕業だとわかりましたが、その時の破片がアンダマン島の東一〇〇キロにあります。「ナルコンダム」島に漂着したという新聞記事がありました。

以上のことが今まで日本で報じられたアンダマン島についての記録・記事でありまして、余り話題になる島ではありません。戦後はインド領となり一時ソ連の基地（恐らく通信関係）もあつたようですが、今日では一般の人も行けるようになっております。しかし観光になるような所もありませんので、一般のツアーの方は殆ど行っていないようです。

この島にもともと住んでいた原住民は、東方見聞録にも出ておりますネグリート族の一種で、四尺足らずの背の低い大変古い民族だそうで、現在でもジャングルに住み、畑も作らず家らしい家もない狩猟民族で、町には殆ど出て参りません。日本で言えば縄文以前の生活を現在でもしている珍らしい民族で、私達のいた当時でも五百人足らずと云っておりましたから、現在では数十人程度以下で、そのうち滅びるのではないかと思ひます。余談になりますが、人類学の本によりますとネグリート族は、アンダマン島とマレー半島のどこかの山中と、それからフィリピンのこの前火山が爆発したピナツボ山の麓に、それとアフリカのどこかの所に住んでおり、合計して東南アジア三ヶ所、アフリカ一ヶ所に分れているそうです。フィリピンのピナツボ山麓のネグリート族について日本のある大学の先生が調査されておりますが、戦争中日本軍のクラークフィールド航空基地軍の部隊がそこに逃げ込んだ所です。ピナツボ山麓の民族はかなり前から文明と交流があつたと思ひますが、アンダマン島の原住民であるネグリート族は今日に至るまで全く文明と交流がありませんので、人類学の興味ある方が調査されたら面白いと思ひます。先程も申しましたように滅亡の瀬戸際にありますので早い方がよいでしょう。

アンダマン島はイギリス統治時代には、インドとビルマの犯罪人を流した所謂流刑の地です。で、町やその近郊にいる住人は犯罪人か、またはその子孫で、当時で二万人位で内インド人一万二千人、残りビルマ人でした。現在は十万人位住んでいるそうです。

したがって町で一番立派な建物は監獄で、レンガ造りの三階建ての堂々たるものです。岡井さんが戦争中二週間程アンダマン島に行かれたので、岡井さんはご覧になりましたか。私は残念ながら中を見ておりませんが。

だから罪の重い人は監獄に入れ、刑の軽い人は皆町に住んでいる訳です。罪人は大体男が多いものですから、住民の構成は男四人に対し女一人の割合なんです。

ここの住民は今申しましたように、英国政府によって政治的に送り込まれたようなものですから、住民の食糧は三割位は自給し、残りは輸入に頼っていた訳で、日本がこの島を占領してから、まずと食糧はビルマなどから輸入して一般住民に配給していました。

先程も申しましたようにアンダマン島では、住民の食糧は三割位しか自給できず、残りは輸入していた訳ですから、日本が占領した後でも、軍が皆住民に食糧を配給していた訳です。昭和十九年の頃まではビルマなどからの輸入も順調で良かったのですが、十九年の終り頃から補給船が途中で米英の潜水艦にやられ始め、それが段々ひどくなり、二十年に入ると補給が殆ど出来なくなりまりました。私も十九年の八月、港の入口で日本の貨物船が轟沈させられたのを目撃いたしました。最後には二十年五月のことですが、巡洋艦羽黒でシンガポールから強行輸送することになり、艦の魚雷発射管など全部取外して、そこに食糧やら医薬品やら山と積んで補給作戦をやりま

したが、マラッカ海峡で運悪く英国の機動艦隊と夜半に出会い、砲撃で沈没してしまいました。その後は補給は皆無となり、したがって我々軍隊にも住民にも食糧の配給をどんどん減らして、二十年八月には軍人軍属は勿論住民に至るまで完全自活に向けて進んでいきました。各部隊は死にもぐるいでジャングルを切り開いて芋植えした訳ですが。

こういう状況ですので、一般住民に対してもそういう指導をした訳ですが、なかにはそういう指導に従わん奴も出る訳です。住民二万人もおれば当然ですが、指導に従わない「不良分子」に対しては食糧切符を交付しないことにしました。この不良分子が町におることは、最後の時に非常に厄介になる恐れがあるので何かしないといかんという訳で、食糧疎開という名目で島流しにすることにしました。この決定に至るまでには、民政部長（民間人）などは反対したようですが、また住民側にとっても食糧不安からビルマなりインドなりに逃亡を企てる者が出る有様で、これが軍令違反ということで処刑されることになりました。

以上が戦争末期のアンダマン島の状況です。

さて愈々本論に入ります。戦犯として処刑された方は東条さんなどのA級を含めまして全部で一、〇六八名おられる訳ですが、その内アンダマン関係者は三七名おられます。アンダマン島には陸海あわせて九、〇〇〇名の軍人が駐屯していましたので、その内三七名の戦犯刑死者とは比

率的に非常に高い訳で、あのフィリピン地区でも戦犯刑死者は七〇名程度ですから。戦犯裁判で無期とか十五年とか有期刑の方はたくさんおられますが、割合早く帰って来ておられますので、死刑でなければよいわけです。

B・C級戦犯の一般的パターンは

- (一) 捕虜・住民に対する個人的な虐待、暴行などの事件
- (二) 軍令違反者に対する処罪事件
- (三) スパイ・抗日グループに対する処罪事件
- (四) その他

に分類出来ると思いますが、(一)に属する事件が一番多く、しかも他人のものと間違えられて濡れ衣を着た方も多勢おられるようです。もちろんアンダマン島でもこの種の事件が随分ありました。が、戦争につきものでしょうね。

(二)の軍令違反事件とは占領地ですので軍から種々雑多な命令、布告がでてゐる訳で、これに従わない者は取調を受け、その間暴行を受けたとか色々あります。戦争中の軍人のすることですので止むを得ないと思ひますが、日本の軍人は他国の軍隊より若干度が強すぎたと思ひますが。アンダマン島のこの分類に入るものとして食糧不安から逃亡を企て、運悪く発見され処罪された事件があり、処罪の方法が残酷であるということとで戦犯になつた例があります。

(三)のスパイ・抗日グループに対する日本軍の処罪のやり方が問われ戦犯になった例は、占領地のどこに於てもあり、その規模も大きな例が数多くあるようです。アンダマン島に於てもスパイ事件はありましたが、抗日グループによる反抗事件はありませんでしたので、この種のものに関する戦犯問題はありません。

(四)のその他の分類に入る事件としてアンダマン島で特異な大きな事件が起きましたので、これについてお話ししたいと思います。

先程も申しましたように、アンダマン島では住民は昔から三割位しか食糧は自給していなく、残りは輸入に頼っていた訳ですから、日本軍がこの地を占領以來もずっと住民に食糧を配給していた訳です。ところが十九年の終り頃から二十年始めにかけて補給の輸送船が敵の潜水艦にどんどんやられ、最後に巡洋艦羽黒による強行補給も失敗に終わりました。二十年の八月初め頃に海軍は四〇〇名位の所謂「不良分子」を検挙して食糧疎開のいう名目で「ヘヴロック島」に島流しいたしました。この島はアンダマン島の東側すぐ近くにある無人島ですので、勿論食べるものもありませんから、移住した結果がどうなるか予見できた訳です。この島の近くには敵の潜水艦が時々出没しますので、夜間に小さな舟艇で決行しましたが、島の近くで珊瑚礁に乗り上げ座礁してしまいました。止むを得ずそこで移住者を降ろし、夜の海の中を泳ぐか、歩くかして島にあが

らせた訳です。途中で大部分の住民が溺死したようですが、運よく島に上陸した人々もビルマ人とインド人とで互いに争い、それによる死亡者もあったようです。終戦後の九月にこれはまずいということで調査に行ったところ十三名しか生存者はいなく、殆ど死亡した訳です。

ジャングルの無人島に食糧も殆ど持たずに移住させればどうなるかは十分予見出来た筈です。命令者の海軍司令部は「殺せ」と言う指示は出していませんが、結果は十分予見出来た訳です。で、今になって考えると非常に倫理観に欠けた処置だと思っすけれど、まあしかし当時にしてみればどうなんですかね。この事件で刑死された人の一人内田主計長の遺書を読みますと

「その当時の事情としてやむにやまれざる処置だった。」とありますね。

陸軍はどうしたかと言いますと、陸軍担当の警備地区から不良分子一五二名（これには婦女子を含んでおりますが）を検挙してアンダマン島の西側にあります「タマガリ島」という小さな無人島に連れ出し、あっさり銃殺させた訳です。陸軍というのは非常にあっさりして、まして文句なしにポンとやるんですから。海軍の方は何とかして生かそうと思っただかどうか知りませんが、島流しですませ、自分では手を下さなかつた訳ですが、結果は同じで殆ど死なせた訳です。陸軍のこの事件を第二タマガリ島事件と呼んでおります。

付表 アンタマン島における戦犯事件

海 軍 関 係	陸 軍 関 係
<p><u>食料事情悪化による事件</u> ヘヴロツク島事件 20年8月4日 住民約400人を同島に移住せしめ、13人を除き残り死亡せしむ。 刑死者 第12特根司令官、主席参謀 主計長、特務班長 輸送指揮官、艇長2名 他（量刑3名） <u>逃亡住民（軍令違反）</u> スチュワード・サウンド島事件 20年8月上旬 軍ボートを窃取しビルマに逃走しようとしたビルマ人9名を逮捕し、<u>斬殺</u>および銃殺。 刑死者 尉官3人</p>	<p>第二タラヅリ島事件 20年8月6日頃 同島において住民152人（婦女子舎）を銃殺。 第35混成旅団長、参謀1 他（量刑1名） 第1タラヅリ島事件 20年7月24日 軍舟艇を盗み島外に逃走しようとした62名（婦女子舎）を逮捕、同島において銃殺。 ナン他（量刑3名）</p>

海軍の「ヘヴロック島」島流し事件、陸軍の「第二タマグリ島」事件は何れもアンダマン島の食糧不足に帰因するもので、軍の組織的犯罪と言つてよいものです。これら戦犯に関する裁判はシンガポールで英軍により行われましたが、英国担当地区の最初の裁判であり、したがって復讐心も大きく判決はシビアなものでした。同期の上杉君は通訳としてこの裁判に立会つたそうです。が、やはり始めのうちは判決はきびしいものがあり、後になる程甘くなつたと申しておりました。この事件の裁判で、海軍側は司令官、首席参謀とか主計長それに特務班長が事件の企画・命令したということで死刑の判決を受け、さらに島流しの輸送を実行した輸送指揮官、舟艇の艇長など三人が、やはり取扱いが悪かつたということで絞首刑になつた訳です。

一方陸軍の方は、あつさり全員銃殺にしたにもかかわらず絞首刑になつたのは旅団長と参謀の二人だけで、銃殺を実行した将校などは量刑ですんでおります。戦犯では、量刑の人は無期でも十五年でも実際は皆早く帰りましたから、死刑の判決でさえなければよい訳です。

さらに食糧不足に帰因する住民の逃亡事件が陸海夫々あり、処置の仕方が少し異なりますので、判決も異なる結果となつた事件があります。スチワード・サンド島というのは司令部のあります町から一五〇キロメートル位離れた所にありますが、そこでビルマに逃亡を企てた住民を逮捕しました。司令部に処置を伺つたところ、皆殺してしまえという命令でしたので、九名の内三名を

斬殺し、残りは銃殺した訳です。アンダマン島の陸海軍では住民に対し島外脱出をきびしく禁じておりましたので、この処置は戦時法規に違反するものではありませんが、英軍では斬殺を問題にして、これに関係した将校三名を絞首刑にしました。三名の内二名は私と海軍同期でよく知っておりますし、またこの事件は八月上旬に起き、処置した日は恐らく終戦日の極く近くであったと思いますので、一層悲しい思い出となっております。

陸軍の方も「第一タマグリ島事件」というのがあります。これは婦女子を含む六二名の住民が、陸軍の大発（舟艇）を盗んで島外に脱出しようとしたところを捕え、陸軍司令部に問い合せたところ参謀からすぐに銃殺せよとのことで、あっさりタマグリ島に連れて行って銃殺にしてしまいました。担当の大隊長は後で住民の中に婦女子がいることを知り大変驚きましたが、後の祭りでした。担当の大隊長は後で住民の中に婦女子がいることを知り大変驚きましたが、後の祭りでした。担当の大隊長は後で住民の中に婦女子がいることを知り大変驚きましたが、後の祭りでした。

これら陸海併せて四件の事件は、何れも英米の潜水艦による補給断絶作戦の結果、食糧事情が悪化し、そのため生じたものであり、彼等が自国民を苦しめた遠因を作ったと言っても過言ではありません。また事件は何れも終戦の年の七月下旬から八月上旬にかけて起きており、あと二、三週間すれば終戦になったことを思うと、不運と言うより仕方がなく残念でなりません。

付表を見るとわかりますように、陸海共同じような事件を起した訳ですが、刑死者の数が陸海

で大変違います。海軍は命令者として司令官、企画者ならびに実行者計九名が刑死されましたが、陸軍は命令者の旅団長と参謀のみの計二名だけで、実行者は含まれておりません。随分差があるものだと思います。あとで関係者から聞いたところでは、海軍の司令官は事件の全容を始めからご存知でしたが、陸軍の旅団長は事件が明るみになるまで全然ご存知でなく、全部参謀が取り仕切っていたようです。しかし事件が発覚したあとでは、全部私の責任であり私が命令してやらしたものですと陳述して全責任を取ったとのことです。そのため陸軍の方は刑死者が少なく済んだと言ふ人もおります。

終戦後の捕虜の時、作業隊を連れて使役に行ったところ偶然にもこの旅団長にお会いしましたが、見ると私が京都大学在学中配属将校としておられた佐藤為徳少将であり、ご挨拶申し上げたところ大変喜ばれ、その日の晩一席設けて戴きましたので一生の思い出となりました。京大出身の方は佐藤さんをご存知と思いますが。

我々海軍仲間では、このため佐藤少将の評判は大変高いのです。一般的に見て海軍の人は知識もあり常識もありますが、いざという時、責任を取る人が少ないようですね。陸軍の方には、知らなくても責任を取るといふ武人らしい人を時々見かけますね。最後になった時に最高指揮官がどういふ風に責任を取るかは、やはりその時の事情によるのでしようが、どうせなるんだったら責任を取った方が良くいふように思いますけれどね。

佐藤さんはイギリスの裁判長からも「態度が非常に立派で、武人らしい。」とほめられています。そのため陸軍の方は、この事件で刑死した人は二人に過ぎないと言う人もおります。

フィリピンでもビルマでも、またニューギニア戦線でもそうなのですが、日本軍隊は占領地の住民の畑から食糧をかつぱらって自活していたんです。勿論口では調達と言っておりますが、実態は略奪なんですね。ところがアンダマン島では畑が少なく、前々から食糧は七割近くも輸入に頼っていた訳ですので、住民に対して日本軍が配給していたのです。こういう事情は他では余り聞かないと思います。太平洋の小さな島で補給が途絶え、そのため日本軍が大半死亡したという例はありますが、住民への配給がむづかしくなり、そのため島流しとか銃殺した例はアンダマン島以外では聞いたことないように思います。

この事件のイギリスの軍事裁判ですが、やはりイギリス人というのはアメリカ人と違って過去に対して執念深いというか、復讐心が強いというのでしょうか。京都大学の会田先生の書かれた「アーロン収容所」という本があります。これは終戦後のビルマ捕虜収容所の記録ですが、イギリス人は非常にしつこいことが実例でたくさん出て参ります。だからアンダマン島のこの事件でもそうなのですが、シンガポール地区の最初の裁判ですので必要以上に厳しい判決を出して自己満足すると共に、住民に対していい顔をしようという気持ちが強かったのでしょうか。

また有期刑で帰国された方の手記を読みますと、シンガポールのチャンギー刑務所内では、戦犯の人に対し随分リンチが多かったようですし、これは日本に対する復讐心の現れでもあり、一つにはイギリス人の本性でもあるのでしようね。普段は教養のため自制しているものでしようが、こういった時には民族の本性が現れるのでしよう。

軍隊というのは、どこの国の場合でもそうでしょうが、倫理観に欠ける所があります。戦争でお互いに殺し合うのですから、やむを得ないのでしようが。アンダマン島のこの事件も、軍人の倫理観の欠除に基づくものでしょうが、一方では刑死した主計長の遺書にありますように「やむにやまれざる処置だった。」という考えもわかるような気がします。

私自身のことです。申し訳ありませんが、私はアンダマン島の司令部のある町から海上三〇〇キロ離れた小さな無人島のレーダー・サイトにおりましたが、終戦の年の七月下旬に突然三十数名の住民―婦女子を含みますが―が送り込まれました。先程の島流しの食糧疎開の一端でしょうが、こちらにも食糧が十分あるわけではないし、治安上も問題がありますのでびっくり致しました。とりあえず古い兵舎に住ませ面倒を見ましたが、第二陣として九月には一〇〇名程追加するとの参謀からの通告があり、どうして食べさせようかと困り果てました。ところがいいことに八月十五日で終戦となり、この件は中止されましたのでほんとうに助かりました。

アンダマン島の本隊の事件も、何れも二十年の七月下旬から八月月上旬にかけて行われたもので

すので、二週間程遅ければ、あるいは終戦が二週間早ければこのような事件も起らず、有為の人が刑死することもなく終ったことでしょう。運が悪かったと言えばそれまでですが、残念なことです。

アンダマン島での食糧不足から生じた戦犯問題について、お話しして参りましたが、B・C級戦犯については、占領地の特異性により色々のケースがあるものだと思います。

あまりすつきりしない話でしたが、これで終ります。

(元日塗エンジニアリング(株)社長)